

下の句かるたの由来その1

(名実共に伝統文化となる)

1.今までの諸説

(1) 北海道の百人一首

北海道の百人一首は「下の句かるた」と呼ばれる独特なもので、百人一首の下の句だけを読み、下の句を取るという遊びである。

また「板かるた」とも別称されるように、縦75mm よこ50mm 厚さ5mmの木ウノ木などなめらかな木肌の札に、草書体の墨字で下の句を書いたもので、出だしの語句を特別大きく書くのが特徴となっている。

(2) 「板かるた」の発祥地

開拓期に屯田兵によってもたらされたと言われているが、1875年(明治8年)と76年に札幌の琴似と山鼻地区に屯田兵が入植したよりもっと以前に地方(ジカタ=羽幌方面)の人たちが遊んでいたという説もある。

(全日本下の句歌留多協会永世名人山本 満氏談 MonthlyWord2004年1月号より)
今まで、諸説があつて「下の句かるた」の発祥は不明とされてきた。

(3) 「板かるた」で遊んでいた地域

1965年12月14日北海道新聞によると、

「百人一首の取り札に木札を使うところは北海道だけではない。日本海側の各県には、木札でやっている方がかなりある。山形、秋田両県では、木札の方が優勢だし、石川県でも昭和の初めごろまでは能登半島の漁村では木札が使われていた。また、島根県出身の俳人、天野宗軒さんの話では、「大正7、8年以前には、島根、鳥取両県でもいなかでは木札が普通だった」とのこと。

また、「下の句」について、『北方文芸』主宰の辰木久門さんは『私は石川県の漁村の出だが、幼いとき漁場の若い衆らが下の句だけで百人一首をやっているのを見たことがある』と記述されている。(参考資料1)

2.文献による新事実の発見

(1) 新たな1ページ

1987年12月24日北海道新聞文化欄に日本近代文学学会会員好川之範氏が「板歌留多と戊辰戦争」と題して寄稿している。その切抜きを読んでいたら、「会津若松市史」に文化文政期頃から、会津若松藩では「板かるた」が武家や商家で行われるようになった。しかも「対列競技」とか「下の句を読みて云々」と書かれていた。(参考資料2)

これだと思い、2003年12月20日会津若松市役所「市史編纂室」あて照会したところ、12月31日記念すべき資料が届いた。

昭和 16 年 8 月 25 日発行の「会津若松市史」911 ページ「第五節 歌留多」の項に「百人一首のかるたは紙製を廃し、朴板にして之を造り、且つ歌の頭字を大書して見やすからしめたり」「対列競技するときは」「下の句を読みて下の句を探る習ひあり」

と書かれている（参考資料 3）

北海道の「下の句かるた」の原点がここにあるではないか。

さらに

平成 14 年 1 月 31 日発行 会津若松市史 22 民族編②諸職 職人の世界 [暮らしと手仕事] 侍の内職の項に「板カルタ」について触れている。

「今では失われたものの一つに板カルタがある」「下の句を読み云々」と さらに「これは文化文政(1804~29)頃に武家や商家で始まったと伝えられる」

と書かれている（参考資料 4）

(2)二つの市史に疑問点や矛盾点が有る

二つの市史を良く読んで見ると疑問に思うところや矛盾を感じるところがある。

①疑問点は

「職人の世界」（市史）に文化文政時代から「板かるた」があったとある。

根拠となるものは何かとの疑問である。

市史編さんグループの回答は「原典」は無い。「伝えられてきた」との事である。原典が無いのは少々残念ではあるが、古い歴史を有する地であり信憑性が高いと考えて良いのではないだろうか。

②矛盾点は

読みの問題である。昭和 16 年の市史には、

「下の句を読みて下の句を探る習ひあり」と書かれているが、

平成 14 年「職人の世界」（市史）には、

「下の句を読み、上の句のカルタを取りあうという普通とは反対の遊び方をする」と書かれている。大変な違いである。

市史編さんグループの回答は「先の市史(16 年発行)の誤植でなかったかと考えられる」であった。

私が推考するに、昭和 16 年の編集者は、明治あるいは大正生まれの人であり、子どもの頃に下の句を読んで下の句を探っているのを見た事があるか、遊んだ経験がある人達であろうと想像が出来る。

(2)

平成 14 年「職人の世界」(市史)を良く読んでみると、現在本州で行われているかるたとは違う。今のかるたは、上の句から下の句を読み、続いて取り札の上の句を読む。上の句が読まれたときに下の句の札を取るのである。

「下の句を読んで上の句を取る」確かに普通とは反対である。

初期の頃の板かるたと思われるものが現存する。

(資料 5 会津若松出身で現在小田原市に在住の中野文雄さん所蔵)

同じような物が北海道開拓記念館に所蔵されている。(箱の蓋に大正 3 年 1 月と記載されている) このかるたも大きかったような記憶がある。

旭川赤翼歌留多俱楽部相談役の山本 実さん(94 歳)に大判のかるたについて聴いたところ、「大正時代や昭和の初期頃は今の札よりも大きく大会でも使用していた」とのこと。

「会津藩校日新館」にもかるた(参考資料 2 に掲載の写真)が所蔵されている。

大判のかるた(資料 5)や北海道開拓記念館そして日新館の「かるた」を良く見ると、下の句のみが書かれており上の句が書かれていた形跡はない。

これらを見る限りでは下の句を読んで上の句を取ることは出来ない様に思うのだが。

会津若松の人たちが大正あるいは昭和の初期にどのような遊び方をしていたのか非常に興味がある。会津若松市の 80 代あるいは 90 代の元気なお年寄りに、若い頃のかるた遊びがどのようなものであったかを確認すべく作業中である。

いずれにしても「板かるた」は、文化文政時代の頃から使われていた。

「下の句を読み下の句を取る」遊びとして伝わってきたことは間違いないものと考えて良いものと思う。

疑問と思われる点が有るとは言え、これほどはっきり書かれた文献を今まで見たことがない。

市史を読む限り、間違いなく「会津若松」が発祥の地と言える。

藩令?で「かるたは紙製を廃し、朴の板にする」多分僕約を旨とする意かと思うが、こうして「板かるた」が生まれたことが立証されている。

さらに、「歌の頭字を大書する」「對列競技」「下の句を読みて下の句を探る」となれば、もう間違いの無いものと言って良い。

今まで、もやもやした「板かるた」や「下の句」の発祥地がこれで解けたのだ。奇しくも 200 年後の 2004 年に謎が解けたのも何かの縁かと思われる。

「下の句かるた」が歴史的背景を持って今新たな 1 ページが開かれたのである。

(3) 会津若松藩の人々の移住状況

「安政2年(安政年間 1854~60)に幕府が本道の地を直轄せし際本道一部の警衛を命ぜられ尋て所領を賜りしのみならず明治維新の際戦ひ敗れて士族等大に困窮したれば開拓使の初め移住したるもの少なからず其後多少の移住者ありしか」

(参考資料6 殖民広報第74号 大正2年9月号 各府縣住民概況 12 福島縣より=道庁文書館資料提供)

会津若松藩からは次のような入植があった。

明治2年9月 会津藩士 小樽 190戸 700余人

明治4年 会津藩士 余市郡黒川・山田村

明治9年 屯田兵 札幌郡山鼻村

明治11年 屯田兵 江別村江別

明治31年 農民 上川郡東旭川村 等

(北海道移住団体リスト=道庁文書館資料提供 参考資料7)

「板かるた」や「下の句」で遊び始められてから約50年後に会津藩士が北海道に移住し、「板かるた」や「下の句」が持ち込まれたことは十分に想像される。その後次々と会津藩や日本海側各県から移住しており、他藩で「板かるた」に慣れ親しんでいた人も少なからず居たものと考えられ、受け入れられる生地があったのではないだろうか。

正月の遊びとして、冬の夜長を家族や近隣の人たちと楽しむ遊びとして自然発生的に広まっていったものと思われる。

諸説(2) 「板かるた」発祥地の項で、山本永世名人が、明治8年以前から遊んでいたと言っているが、明治2年に会津藩士が入植しており、屯田兵入植前説の裏づけとなるのではないだろうか。

(4) 日本海側各県の人々の移住状況

明治11年頃から江別村、厚田村、野幌、栗沢、岩見沢、長沼村、幌向村等札幌近辺から次第に全道域に広がっている。(参考資料7)

これらの人々の中に「板かるた」で遊んだことがあった人も居たであろうと想像される。

(5) 会津若松以外で「板かるた」で遊ばれたのはなぜ

日本海側の各県が独自に開発し遊んでいたと仮定した場合、

① 当時紙が高価であり、いなかでは入手が困難なためいろいろ工夫し、身近にあった木端を利用した結果が偶然にも一致したのではないだろうか。

会津若松が発祥の地ならば、

①会津若松と交流のあった親藩に伝わりそれが広まった。

本家筋 飯野藩(上総)、保科家

江戸城溜間詰 井伊彦根藩、松平高松藩

縁戚 美濃高須藩、松平桑名藩、前田加賀藩、阿部忍藩(武藏)

上杉米沢藩、稻葉小田原藩、浅野安芸藩、毛利長州藩等

②養子縁組、嫁入り等で他藩に伝わる。

③商人から他藩に伝わる。

④遊学、留学先で広まる。

⑤幕末、会津若松藩が京都守護職を命じられ弥太(下級武士)たちも多く京都に向かったとのこと、幕末の気忙しい時期であったが、弥太たちが息抜きに「板かるた」で遊ぶこともあったのだろうか。

それが各藩に伝播されたと想像することもできる。

(会津若松市史編さんグループからは時代背景を考えると有り得ないと回答あり)

会津若松藩以外で文化文政時代よりも古くから「板かるた」や「下の句」で遊んでいたところがあったかも知れない。

今の時点では会津若松藩から各地に広がっていったと考えるのが妥当と思われる。

3.結

他に歴史的検証ができる新たな文献等が見つかるまでは、「板かるた」「下の句かるた」の発祥年を文化文政時代(1804~29) 発祥の地を会津若松として良いのではないだろうか。

これで「下の句かるた」も奥の深い歴史を持つ誇りうる伝統文化となったのである。

今まで「下の句かるた」を守り育てくれた多くの諸先輩、それを受け継ぎ次代へ引き継いで行くべく活動をしている多くの仲間がいることを誇りに思う。

江戸末期に会津若松で発祥し受け継がれた伝統文化が北海道で見事に華開きいつまでも何時までも続いていくことを心から願うものである。

2004年1月3日

2004年1月14日

2004年2月3日

2004年2月5日

全日本下の句歌留多協会 副会長

旭川赤翼歌留多俱楽部 会長

宮野勝